美紗の会 たより

思えばこそ

西松　布咏

今年も早や半年が過ぎようとしている。

古くから続く「夏越しの祓」は半年に一度心身を清める行事だという。夏至を過ぎた今　この半年間を振り返ってみたいと思う。

三月十七日高輪和彊館で「第五十五回美紗の会のつどい・三十五周年記念演奏会」を行い新名取のご披露をして大勢のお客様と共に新年のスタートを祝うことが出来た。そしてあふれる陽光が降り注ぐ四月二十二日。三年ぶりで神田明神本殿において清水宮司様の慈愛に満ちた厳かな祝詞を拝し五名の新名取が誕生した。前回療養中で欠列した福岡俊弘こと己紗俊咏が宮司様の計らいで参列出来たことは何より嬉しかった。十三年前　神田神社の境内にある「神田の家」の座敷での独演会の折りに清水宮司様が参席され私の唄を聴いて下さりご縁をいただき爾来二十二名のお名取が心も新たに芸の道を歩んでいる。お別れのご挨拶の折に「是非又お唄を聴かせて下さい」とのお言葉を賜り私自身ますますの精進を誓った佳き日であった。

五月十三日に広尾の祥雲寺で「いと・いとし」コンサートを開催した。さがゆきさんの囁くような優しい聲を聴いた時　母が長い間お世話になっている老健センターのカフェで療養中のお年寄りや広尾界隈の方々にギターと三味線のコラボをしてみたいと川崎さんに相談した。程なく熱き想いを綴った趣意書と共に主催者を訪ねたが私達の真意が伝わらず愕然としたがその後、信じられない縁の糸が結ばれることになる。私の落胆ぶりを見かねた友人が広尾のお寺を紹介してくれたのが「祥雲寺」何と北園克衛の菩提寺だったのだ！

くしくも桑沢美大の特別講演会の為に来日予定の北園の研究家であるジョンソルト氏が参加してくれるというサプライズがつきその日も思えばこその縁の糸がひとつに結ばれた忘れ得ぬ日となった。

六月四日は「天才と狂気は紙一重」のタイトルで＝知られざる日米の偉大なる芸術家達第二弾＆ストリート・政治的・ゲリラアート＝と題するソルト氏の講演があり私も十人の芸術家のひとりとして名を列ねゲスト出演させて頂いた。広いホールに掲げられたパネルの中からつんざくような黒人のラップから始まった二時間半の刺激的なデザインやストリートアートの話の合間に演奏した三味線の音色。若きアーティストの卵達にどう響いただろうか・・・

六月九日「第六回ニュアンスの会」がようやく実現に至った。祥雲寺のコンサートから想を得たソルト氏から六月六日は北園克衛とアメリカのビート詩人ケネスレクスロスの命日なので二人の業績を偲ぶ会を開かないかと相談された。あまりにも日時だけが先行する無謀さに多いに躊躇したが気が付いたら会場探しを始めていた。

祥雲寺のコンサートが終わった数日後、爾後の報告をと北園克衛の墓前に行くと当日ソルト氏が供えたトルコ桔梗が暮れゆく夕日のなか薄紫に揺れていた。既に枯れていた想いをそっと土に返し是非「ニュアンスの会」を実現させなければと心に誓った一刻であった。心当たりの友人に相談したが思うような会場が見つからず思案に暮れていたある日。我が美紗の会の佳咏会長が見兼ねて心を尽くして下さり事態は急速に進み、なんと銀座のど真ん中にあるギンザグラフィックギャラリーで満員の参加者を擁し当日を迎えることが出来たのである。

北園とケネスの二人が残した様々なデザインの聲　詩を朗唱する二十人のゲスト達の個性あふれる英語と日本語による聲　三味線で詩を綴る私の聲がさまざまに共鳴しまさに異次元の世界が繰り返す波のように拡がっていった。

過ぎていった数々のシーンを今思い返すと・・・思えばこその私を支えて下さった皆々様の暖かいお気持ちのお蔭と胸が熱くなって来る。

これから迎える半年の日々も感謝の気持ちを忘れずに精進してゆきたいと心から思う。

三味線と私

三浦　勝浩

「ところで後ろの方、小唄のお師匠さんなのよ」私が布咏師匠と出会ったのは神楽坂の、とある飲み屋でのことである。小料理屋とも居酒屋ともつかぬ居心地のよい店で、その日は半年ほど過ごしたウィーンから帰国、ようやく日本での生活のリズムを取り戻し長らくご無沙汰となっていたその店に顔を出したところであった。昨年四月のことゆえ、ちょうど一年前のことになる。

しばし母国を離れていたせいか、やけにその頃は“日本的なもの”に飢えていて、今思い返してみれば、日本の伝統文化への関心が海外生活を経て私の意識に表在化しただけなのかもしれない。いずれにせよカウンターで久しぶりの酒を楽しみながら、そんな話題にふけっていたからなのだろう。見かねた女将さんがたまたまその場に居合わせた布咏師匠を紹介してくれたのだ。お調子者の私はさっそく稽古見学を申し出たのだが、この後、大型新人が誕生しようとは誰しも知る由がなかった訳である。

もともと三味線や小唄に関心がなかったわけではないが実のところ、三味線の音色に合わせて唄を聞いたことはなく、まして自らやってみようとはゆめゆめ思うことはなかった。しかしウィーンの人びとが日頃から数百年続く文化や習慣を肩肘はることなく楽しむ姿を垣間見て、私も帰国してからは矢も盾もたまらず、日本が誇る文化に日常的に触れないではいられなかったのである。

私が初めて唄と三味線を聞いたのは、ほどなくやってきたゴールデンウィークの週末、白金の稽古場で布咏師匠に手本としてやっていただいた「はじめより」ということになる。ほんの数十秒、唄が醸す恋心の機微と三味線の切なくもふくよかな音色にすっかり心酔した私はその場で弟子入りさせていただいたのである。我ながらよくもまあ、聴いたこともない三味線の、それも初対面の先生におしかけて特に何を考えるでもなく入門したものだとその無計画ぶりを恥じ入るばかりであるが、それでも唄やら三味線やらを色々と聴いたことがないまま師匠に出会えたことは幸いであったと感じている。その後YouTubeで聴いてみた昔の小唄やら端唄は、古くさくてなにやら野暮ったいものに感じられるものも少なくなかったからである。もしもそれらを以前に聴く機会があったとしたら、三味線そのものに興味を持つことはなかったかもしれないと思う。

前川　充

三味線の稽古を始めてからというものは、「どうしてこんなに面白いものを知らずにきてしまったのだろう」と驚くことの連続である。

歌詞に込められた四季や自然の情景、男女の恋心、果ては販売促進のためのコマーシャルソングは現代の我々が持つ感情と何一つ変わらず、三味線の調子に合わせいきいきと江戸町人の心意気がよみがえってくるようではないか。西松流が現代的に進化しているからなのか、あるいは芸としての完成度が高いからなのか、そのような評論を初心者の私がするのもおこがましい話であるが、とにかく師匠からお教えいただく三味線と唄は古くささとは無縁であり、稽古でピタリと間があったときは最新のナンバーをカラオケで熱唱したときの爽快感と通づるものがあると感じている。現在、日本が文化的にどの程度成熟していると言えるのかは知らないが、私自身は帰国から強烈に生じた文化的なるものへの欲求が、月三度の稽古に通うことで余すことなく満たされており大変うれしく思っている。幼少の頃にピアノを習っていたこと、若い時分にギターに耽っていたことも幸いしてか、「大型新人」なる過分な評価をいただけるほどには上達できているようだが、調子に乗りやすい性分ゆえ今後とも謙虚に精進していきたい所存である。

名取とは新たな旅路の始まり

巳紗　紫咏

四月二十二日、神田明神本殿にて、厳かな中にも、師匠、立会人、そしてご来賓の方々の慈愛に満ちた眼差しに包まれて、私たち新名取（かたせ梨乃こと己紗典咏、前川真紀子こと己紗紫咏、勝呂弥生こと

己紗弥咏、菊地郁花こと己紗咏扇）は名取式を迎えました。雅楽の調べにのって、雅楽奏者・巫女の先導により、明神会館から本殿まで参進。本殿にて、神職からの祝詞奏上の中、それぞれの取り立て名を神前にて読み上げて頂きました。大好きな西松布咏先生からお名前を頂けるという喜びと、一生に一度の晴れ舞台に立たせて頂いたこと、皆様とのこのご縁に感謝します。そして、この機会に、名取とは何か、ということをここに綴ってみたいと思います。

布咏師匠の芸への想いは、あまりにも深く、清冽で、厳しいながらも慈愛に満ちていて、とても一人の者に丸ごと受け止められるものではない、継げるものではありません。だから、名取達の役割は、師匠の芸を皆で少しずつ、分かち合いながら、受け継いでいくこと。皆で、師匠の想いを分かち合い、共に師匠をお支えしていくこと。一対一のお稽古の中で、心を師匠と通わせ、師匠を通して皆でつながっていくこと。師匠が私たち一人、一人に向き合って伝えてくださる唄への想い、その奥底にある見えないもの―それらを唄い取っていくこと、糸にのせていくこと。そのように感じております。

布咏師匠は、おっしゃいます。「それぞれの、その人のもっている良いものを表現してほしい。」それゆえ、名取の姓は、己紗。「三線譜は、目安にすぎない。」唄が「入った」ところから、譜面どおりに弾けるようになってから、ようやくスタートラインにつける。ここからが本当の唄と糸の探求の始まりなのだと。「その人がもっているものが自然と滲み出るような唄を歌ってほしい」だから、先生は、「心通うお稽古」である対面の丁寧なお稽古にこだわっていらっしゃるのですね。グループレッスンでは、大切なことを何も伝えることができないから、と。私たちは、師匠からとても贅沢な時間を頂いているのです。

己紗紫咏という名を頂戴することは、そのような唄への想い、奥底にある見えない何かを探し続ける長い長い旅路へと向かう第一歩にすぎないのです。美紗の会に入門してから間もなくして、先代の会長であられた朋咏さんに頂いたお言葉「続けることが、大事よ。」―その言葉の意味することが、ようやくわかったように思います。続けることで、ようやく見えてくるもの、感じることができるものが、確かにあるのだと思います（自分に足りないものが身に染みてくるのも、その一つです。そこからまた、新たなチャレンジを始めることができます）。師匠からお教え頂いたもの（目に見えないものも含めて）をつないでいくことの「覚悟」のようなものを、名取式を通して「名」と共に謹んで頂戴致しました。美紗の会の、この素晴らしいご縁に感謝します。幾久しく、末永くこのご縁が続きますように。そして、今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りたいと存じます。布咏師匠、美紗の会の皆々様、どうぞ、今後ともよろしくお願い申し上げます。

前川 充

那須の夜

斎藤 譲一

「那須の原稿お願いできますぅ」とちょっと語尾の上がった師匠の声に「はい！」と答えたもののはたと困ってしまいました。那須の演奏会はとても愉しい時間でしたが、どのように皆さまへお伝えしようかと。いつもこの「たより」を読ませていただいていて感じていたのは皆様の格調高い文章に気後れして、小生の稚拙な文ではと思いつつ、手掛かりに日記（中学二年から半世紀続けておりますメモ帳）を紐解いて見ましたら、次のように記しておりました。

五月二十六日新宿高速バスターミナルから高速バス「那須」に乗り三時間半、演奏会場の那須ギャラリーバーンに到着。会場は「金属妙味」と題して、彫金家、金属造形家さんの金属を素材とした作品の展示期間中。演奏会のタイトルは「金属の聲を唄ふ　―過去と未来へのコラボレーション」。

着物をドレスに仕立てた装いの師匠の端唄「夕暮れ」で演奏会は始まった。師匠の澄み渡る唄声は那須高原の空気を揺らし溶け合い、会場はたちまち風薫る「和」の世界へ。次いで端唄「宇治茶」…爽やかな五月を唄うとして厳選された端唄、小唄全八曲が演奏され休憩。第二部は一変して、「ブルー」、「黒

い肖像」など現代的な師匠の創作曲四曲の演奏。洋装に着替えた師匠の唄声とビートのきいた三味線の音が会場の金属作品の声と同期して新たな造形を創出していくようだ。

今想うと、第二部は照明を絞り、展示されているアート作品の影の中で演奏が行われたのでとても印象的で味わい深く感じました。

考えて見れば江戸時代のお座敷には電気の照明はなく蝋燭の燭台程度の灯りしかありませんので、三味線と小唄などがお寺の御堂や今回の薄暗闇の中での演奏で更に味が出てくることは自然なことですね。ある日の日記には一流の演奏とはと、何やら難しいことが記されていました。自分のことで恐縮ですが、最近は「玉川」と「館山節」のお稽古をつけていただいておりますが師匠から「節は唄えるようになってきましたが、何やら味わい深いものがない、何を唄ってもキャラが明るいので、相手の愛しさや想いの情感がなく軽いノリの唄になっている」と厳しいご指導をいただいておりました。最近このご指摘が頭の片隅にこびり付いて気になっておりましたところ、先日テレビドラマ「崖っぷちホテル」のBGMにフランク・シナトラの「夜のストレンジャー」が流れており、中学時代から散々聴いていたこの唄がこんなに味わい深い唄だったのかと今更ながら気が付いた次第でした。シナトラの唄は自然な何気ない表現で唄っているので気が付かなかったのか、自分で唄い表現しようとする気持ちが働いたので見えてきたのか、はたまた還暦を過ぎた枯れた？人生経験を積んだお陰なのか（自分でこういうことを言うと少々こそばゆいですね！）

今まで何気なく聴いていた唄と自分の小唄をオーバーラップさせて、ストレンジャー・イン・ザ・ナイトのフレーズの何と心地良い響かと、そうか、こういう風に唄えば良いのかと、師匠やシナトラと比べるなど畏れ多いことですが、気持ちだけはシナトラばりの気分で唄ってみようと一人でうんうんと納得していた次第でありました。師匠の唄もシナトラの唄も肩肘張った唄ではなく肩の力が抜けた状態で想いを込める姿勢、話が那須の夜からシナトラに飛んでしまい脈絡が切れ切れになってしまいましたが、一流の唄の共通点とはとの大袈裟な結果になってしまいました。一生出来るかどうか分かりませんが気持ちだけでもこんな風に唄えたらいいなと独り言、いつもながら支離滅裂なお話になりましたが、ご清聴ありがとうございました！

いと、いとし

川崎 隆章

五月十二日午後四時。東京・広尾の祥雲寺で、西松布咏・さがゆき両師によるライブコンサート「いと、いとし」が行われた。初対面で意気投合したのが丁度一年前、互いのライブを訪れ、布咏師匠が「ねぇ、ライブやってみない？」と切り出したのが年明けのこと。ご両人を引き合わせた私が発起人、舞台制作の経験豊かな上田聖史さんにお扶けいただいて、あっという間に当日を迎えたのであった。

当日はよく晴れた日であった。祥雲寺の古くて緑の濃い庭を背景に、前・後半の二部構成で演奏が始まった。

前半は舞台になった本堂の縁側に一間四方の青い毛氈を敷き、布咏師匠は正座で三味線。ゆきさんは椅子でアコースティックギターを構えた。庭を借景として、お二人とも花鳥風月に身を纏うような衣装。小唄、端唄、ジャズ、ファド、オリジナル…二人がそれぞれ宝物のように唄ってきた名曲を、話を挟みながら交互に披露した。

後半は毛氈を取り払い、暮れ始めた庭の景色を縁側と一体化させた。忍び寄る緑と影向。お二人とも流れる水や風のような衣装で、椅子での演奏。ゆきさんのギターは水のような色を奏でるエレキギターに変わり、音も世界観もガラリ、豊かな凄みがでてきた。

二人の「歌の交換」もあった。ゆきさんは、一月ほど前に布咏師匠から受け取った端唄「有明」に、ギター伴奏で新しい命を吹き込んで披露した。布咏師匠は、ゆきさんのギターに寄り添うようにジャズの名曲「Summertime」を高らかに歌い上げた。

そして、当日のフィナーレは、大正～昭和にかけて活動した前衛詩人・北園克衛の最期の詩に布咏師匠が曲をつけた「Blue」。

演奏の前と後半に、この日のためにかけつけてくれた北園克衛研究者のジョン・ソルトさんが「英訳Blue」を朗読。これは実は当日のハプニングであった。

ハプニングはこれだけではなかった。不思議な話がいくつか。

ゆきさんが「有明」を歌いはじめた時、歌声に誘われるように、庭に白い蝶が舞い始めた。野に遊ぶ蝶が、遊郭の菜種の灯を慕ってやってきたというこの唄そのものである。

蝶は「Blue」でも舞った。会場中が「北園克衛さんが聴きにきたわ」と大喜び。会場の祥雲寺が北園克衛の菩提寺だからである。

この会場が決まった経緯にも不思議がある。当初は別の会場が予定されていたのだが、会場との間で話の食い違いが生じて破談となり、まもなく紹介を受けたのが祥雲寺。どうやら克衛さんが「僕の作品を上演するなら」とお招き下さり、当日も蝶の姿で迎えて下さったのだ。

今回の準備期間中、布咏師匠もゆきさんも、世上にはびこる商業主義や芸術への無理解に対して、それぞれ怒り心頭に達し、心を爆発させる局面があった。布咏師匠は怒りに目に涙を溜めながら、芸術家・表現者に対する理不尽な世間に抗議した。一方、ゆきさんは洋楽界にむかって「あなたがたの直感力は濁ってはいないか?こんな弛んだ音楽界に黙っていられるのか?」と大咆哮した。その結果、布咏師の怒りは結果として北園克衛を引き寄せ、ゆきさんの捨て身の咆哮は溢れるほどの共感者を会場に呼び寄せた。本気と誠に勝るものはない。

石川圭一

石川圭一

前衛に遊ぶ言葉たち

—六月九日「詩の朗読—第六回ニュアンスの会」

ヤリタ ミサコ

ジョン・ソルトさんと西松布咏さんが主宰してきた「ニュアンスの会」では、前衛舞踏の若林淳さんや大野慶人さん、華道の千羽理芳さん、タブラやチェロなどと布咏さんの江戸唄との、通常は同じ舞台に上がることのない異ジャンルのセッションが繰り広げられてきました。今回は、言葉によるセッションです。お能にも仕舞という上演形式があるように、言葉をそのままに朗読するのは、装束を着けない舞いに似ています。

六月六日は、ケネス・レクスロスと北園克衛という異色の詩人二人の命日です。レクスロスはサンフランシスコ・ルネッサンスの先駆者でビートジェネレーションの父と呼ばれ、強靭で自由闊達、神秘思想と芸術的実験を実践した詩人。北園は戦前から戦後まで一貫しての前衛詩。デザインや広告業界での評価も高く、コンクリートポエトリーや視覚詩で世界を驚かせ、独自の美学を貫いた詩人。この二人にちなむ、ということは、ジャンルや歴史・先入観・既成の価値観に左右されない、ということです。

布咏さんが北園とレクスロスの詩に曲をつけ、三味線にのせて唄います。伝統的な詩法ではないため、発表当時には理解されたとは言えない、北園の「BLUE」とレクスロスの「摩利支子の愛の歌」。北園は助詞「の」を行の冒頭に配置する独自の使い方で、布咏さんが「の」と鼻母音で発音する音は、聞き手と空間と詩とをふわりと接続させていきます。レクスロスが女性の心情で描いた愛の詩は、抑えながらも溢れ出るエロスの喜びに満ち、布咏さんの高くのびる声が、詩の奥に隠されている美を解放して

いきます。

今回の朗読者は、大学の先生やジャーナリスト、造本家、学芸員、編集者、詩人と多彩な顔ぶれです。京都でレクスロスと交流のあった片桐ユズルさんは五十年前と変わらないお声で、レクスロスとの映像も投影され、観客は半世紀前の会話に加わっているようです。ほんやら洞のレクスロスのトークを再現した奥成さんは、ユーモアたっぷりで大笑い！高木さんやミニヨンさんの朗読にはレクスロスの怒りがこもっているし、浦さん・カゲヤマさん・四釜さん・アンダーソンさんはそれぞれの情熱を垣間見せます。レクスロス原詩の英語と日本語訳が両方朗読されることで、音の響きがよくわかり、意味もぐっと心に迫ります。

北園作品のジョン・ソルトさんによる英訳朗読もあり、英訳を経て北園詩の構造が強度を増すのがわかりました。クールでカッコよくてサイコーだったのは「単調な空間」です。四釜さんの淡々と読まれる日本語と、ジェフリー・ジョンソンさんの英語朗読。「squire！」と発音された直角図形が、鋭く空間を切り裂きます。北園初期作品では、青木さんのみずみずしい声が戦前のモダニズムのハイカラな雰囲気を伝え、浦さんとヤリタのコラボレーションは二人の女声のセッションで、新たな解釈の試みです。ソルトさん訳バイチマンさん朗読の「BLUE」は、乾いた叙情性が落ち着いて表現され、このままずっと聞いていたいと思いました。

例えば四畳半の茶室に幽遠な宇宙を感じ、ひとつの茶椀に四季の空間を見出すなど、木材や土という素材以上に、人間の文化は想像力を持って美を見出してきました。言葉という日常的道具も同じで、視点を変え、解釈に深入りしてみると、二次元の紙に印刷された言葉の列から、それまでとは違った美が立ち現われます。スクリーンに映る映像と布咏さんの唄と三味線、多彩な朗読者による日英の朗読が、レクスロスと北園の詩が持つ普遍の美を豊かに再現しています。生きて呼吸する能動的な言葉たちでした。出演者は、西松布咏、原成吉、ジェフリー・ジョンソン、山本毅雄、ジャニン・バイチマン、奥成繁、ヤリタミサコ、テイラー・ミニヨン、高木真史、青木映子、片桐ユズル、浦歌無子、四釜裕子、ユリ・カゲヤマ、ジョアン・アンダーソン、照沼太佳子、大家利夫、野田尚稔、ジョン・ソルト、田口哲也（敬称略）です。

石川圭一

《今後の予定》

◎九月三十日（日）
午後二時開場 二時半開演
銀座ライオン五階 音楽ホール
己紗の聲
美紗の会名取りによる演奏会

◎十月二十七日（土）
第一部 午前十一時開場 午後一時開演
第二部 午後四時開場 五時開演
人形町 よし梅芳町亭
ゆく秋に映して唄ふ忍ぶ想ひを
唄と三味線 西松布咏

◎十二月一日（土）
午後十二時半開演
赤坂クラブ
第五十六回 美紗の会のつどい
美紗の会一門の演奏と親睦

■たより 第87号
発行者 美紗の会
編集責任者 照沼 太佳子
デザイン 近藤 幹則
■美紗の会
主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三-二-二
白金台プレイス三階
電話 （三四四一）一七二六
（五四四七）一四一二
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www.misanokai.com/